

わが故郷「^{せつこうしょう}浙江省・杭州(こうしゅう)」

はじめに

中国江南の中心都市杭州は、古来より経済と文化の発達した都市であった。町の中心よりやや南に位置する呉山は、春秋呉国の南界と言われる。春秋から秦漢代には、南方の有力都市の一つとされた。隋煬帝が杭州と北京を結ぶ京杭運河を開通させてから、中国の南北をつなぐ重要な交通と貿易の中心地となり、水運の要衝として経済が栄え、また西湖と銭塘江を擁し、景勝の地としても知られる。また五代において、杭州は呉越国の首都としていっそう発展した。南宋期には、北方を逐われた宋王朝がここに「行在」を起し、事実上の首都として機能した。元代にはマルコポーロがこの都市を訪れて、「世界でもっとも美しくて華やかな都市」と驚嘆した。その後動乱期にはやや衰退したものの、明清期には経済の中心地として再び繁栄を極めた。

そして、杭州は世界の190の国家と地域と直接貿易関係を持っている。建国以来、杭州は前後イギリスのリーズ市、日本の福井市、岐阜市など十個以上の都市と友好協力関係を樹立している。クスノキが市樹であり、モクセイが市花である。



杭州市 地理

杭州は中国東南沿海、銭塘江の下流北岸、京杭大運河の南端に位置しており、上海から200キロ、鉄道と高速道路が接続しており、その時間は2時間足らずである。総面積16,596平方キロ、総人口643万人(2003年末)。中国八大古都の一であり、[国家歴史文化名城](#)に指定されている。

杭州の町は海嘯で有名な銭塘江の北側にあって、東と南が河に面している。市街地の東と南には特に見るべき物はないから、特別な目的がない限り観光客は行かない。市街地のうち、南宋の杭州

城に当たる部分は、北は環状北路、東は建国路（明清期の杭州城は今の環状東路の区域まで広がっていたようだ）、西は環状西路、湖畔路、南山路、南は金家山と玉皇山に区切られた縦長の地域で、東西が一番広い北側でも 2.5km、一番狭いところでは 1.5km ほどしかない。南北は大分長くて 6km 以上あるが、南半分は山だから、町の南北を貫く一番の繁華街延安路は 3km くらい、億劫がらなければ歩いて回ることが出来る。

では杭州のみどころはどこにあるかといえば、まずは町の西に広がる西湖とその周囲の名所旧跡、ついで西湖の西と南にある山々とそこに点在する寺院や村落ということになる。西湖は南北 4 km、東西 3km に満たない小さな湖だが、一周すると 15km くらい歩かなければならない。町から杭州の象徴となっている六和塔までは約 7km。更に九溪十八澗から龍井を回って西湖の畔まで戻るとなれば 20km くらいあるが、時間があれば弁当持参で歩いてみるのも面白い。

杭州市 歴史

2200 年の悠久の歴史をもつ杭州は中国七大古都の一つで、人文景観が豊富にして多彩であり、古代の庭、園、楼、閣、塔、寺、泉、壑、石窟、摩崖碑刻が遍く分布しており、また珠のすだれ、玉の帯のような風景、かすみ柳や彩られた橋、またさまざまな姿態、草木の盛んに茂った奇観、青く秀でた山水のように、その風情は無限である。ある詩人の賛には「江南の憶、最も憶たるは杭州！」とある。

市域には、7000 年前の中国新石器時代には良渚文化の発祥地であり、代表的遺跡河姆渡がある。稲作遺跡としては最古に属する。中国六大古都に数えられる歴史ある街で、その起源は秦代にまでさかのぼる。秦代には会稽郡治が置かれた。

隋代の 589 年には郡に昇格し、鳳凰山の辺りに州城が築かれる。大運河が開通すると杭州は運河南端の町として大いに栄え、唐代には大いににぎわっていた。唐が滅び五代十国になると、鎮海軍節度使の銭氏が 907 年に呉越国を建国、杭州は初めて帝都となった。このころの杭州は今の杭州より大きく、宮城は鳳凰山に置かれていたという。

1126 年、金が北宋の開封を占領し、徽宗と欽宗を黒竜江に拉致する（靖康の変）。難を逃れた徽宗の子趙構（高宗）は 1127 年に応天府（今の商丘）で即位、南宋王朝を建立する。が、金に追いまくられて紹興、温州に逃げる。1138 年、北方における抗金義軍の活躍で高宗は杭州に戻り、ここを首都とする。

高宗は杭州での皇帝生活に満足し、北方回復の意思がなかった。このため、北伐に便利で敵の侵入も阻止しやすい武漢や南京などの長江南岸の町を都にせず。安全で豊かな富と美しい風景のある杭州で安逸に暮らすことを望んだ。「山外青山楼外楼、西湖歌舞幾時休、暖風薰得遊人醉、直把杭州當べん（さんずいに点と下を書く。開封の別名）州」。という詩句はそうした南宋貴族の気風を詠ったもの。抗金派の将軍岳飛や牛皋などが和睦派の秦会に殺害されたのも、むべなるかなという気がする。

宋代の宮城は中国の一般の王城とは逆に町の南端の鳳凰山の辺りにあった。このため普通なら宮城の門から南へ延びる御街がここでは南から北へ延びていた。これも防御を優先に考えたためだろう。

南宋の皇帝は金や元に圧迫されていたにもかかわらず、大金を使って杭州の町をきらびやかに飾

り、西湖を遊覧の地として開発した。

南宋が元に滅ぼされると、モンゴル帝国が築き上げた陸上ネットワークと海上世界が結びつけられ、交易を通じてさらに発展を遂げた。その繁栄の有様は、マルコポーロが「キンザイ」として『東方見聞録』で記している。明代には杭州府となり、繁栄し続けたが、1645年清に占領される。杭州は清代も観光都市として栄え、康熙帝5回、乾隆帝6回の南巡の折には、そのつど杭州に長くとどまっている。

杭州の文化

杭州は古くから多くの文人墨客を育てた。最も有名なのは唐代の大詩人白楽天、宋代の詩人・散文家蘇東坡。二人とも杭州の官吏になったことがある、彼らの名にちなんだ「白堤」、「蘇堤」は今杭州の観光名所になっている。杭州のシンボルである西湖にまつる西施の伝説や詩など今なお深く人々の心に残されている。

杭州の気候

杭州の気候は日本と同様の温帯性気候に属しているため、日本の本州の気候とよく似ている。

自慢のところ

上有天堂，下有蘇杭という言葉がある。中国人にとって蘇州と杭州は一度に行ってみたいあこがれの場所である。蘇州は長江流域の平坦地にあり、町の中から山を間近に仰ぎ見ることはできない。また、観光対象も庭園などの人工物が主だけれども、杭州には西湖やこれを取り囲む山と丘陵があり、その中に人工物が点在するといった自然美と人工美が組み合わせられているところに特徴がある。

杭州観光の目玉は何と言っても西湖だろう。杭州の街は西湖の東側に開けていますが、西湖という湖は、その東側を除くと、いずれも山に囲まれている。山に囲まれているからこそ、一つの完結した風景として私たちの目に入ってくるし、そんなに大きすぎない愛着の湧く風景になるのではないだろうか。

この西湖の美しさを詠んだ詩人の中で有名なのは、唐代における白楽天と宋代における蘇東坡である。二人とも杭州の行政官として外から来た人間であるが、杭州の、とりわけ西湖の美しさに魅せられ、その美しさを後世に残そうということで、詩を詠み、またその一方で、この湖が水深1.5メートルという浅い湖なので、泥で埋まらないように湖の浚渫工事をしています。白楽天も蘇東坡も、その浚渫工事で出た泥を積み上げて西湖内に堤を作っている。白楽天が作ったのは「白堤」、蘇東坡が作ったのは「蘇堤」である。いずれも杭州の街から見ると、今では西湖内のアクセントになっていて、この二人の西湖に対する愛情がひしひしと感じられる。白楽天と蘇東坡という西湖を愛する二人の行政官を持ったことも、西湖が今もその美しさを維持している理由の一つだと言えるだろう。西湖は、よく西施という中国史上最も美しいといわれる女性に例えられる。西施は、春秋戦国時代に越王から呉王に召しだされた女性であるが、その美しさのあまり呉王は夢中になり、政治を省みなくなったといわれている。今で言えば、悪女なのだろうか。それはさておき、蘇東坡の詠んだ詩の中にこんな一節がある。

湖の水が輝く晴天の日の良い。

山々が霞んで朦朧とした風情も一興である。

西湖を西施に例えるならば、

淡い化粧の時も濃い化粧の時も、いずれ劣らず素晴らしい。

晴れた日も雨や霏で霞んだ日も、西湖の美しさは変わらない。これは、蘇東坡の時代も今も変わるものではあるまい。最近では、西湖の西側の茅家埠周辺の整備が進められている。蘇堤西側のエリアであるが、これも西湖を泥で埋めないための整備だといわれている。コンクリート等を一切使わず自然の美しさをそのまま残す工事が施されていて、西湖の美しさを後世に残す名工事だと思う。

蘇堤春曉

早春四月、ほのぼのと明るい朝日を迎えつつ、蘇堤に沿ってゆっくりと歩いていくと、おもむろに軽やかな風が吹き、周囲の柳は軽やかに流れるのが分かる。薄くもやが立ち込めるなかで、光り輝く桃の紅い花が露を含んで開くさまは、さながら霞を噴き出しているかのようで、その景色は実になまめかしく人を惑わす美しさである。

春雨がしとしと降り、たおやかな柳の枝のむこうにある西湖を眺めると、薄霞はいよいよ広がり、しだいに遠くしだいに淡くなり、その景色はさらに幻想的なものとなって人々を誘い、「六橋煙柳」と呼ばれている。蘇堤は南山と北山を結んでおり、西湖にあでやかな風景線を添えている。また四季を通じて色とりどりの花があでやかに咲き乱れ、人びとに詩や絵画を見ているかのような錯覚を起こさせる風光であり、長きにわたって人びとが遊覧する格好の場所となってきた。



曲院風荷

曲院風荷とは、夏の日に蓮を觀賞することを主題としており、蘇堤春曉の次、西湖十景の第二位に位置している。「曲院」とはもともと南宋の朝廷が開設した醸造所のことであり、今の靈隱路洪春橋附近に位置していた。当時の西湖湖岸に臨み、岸に近い湖面では蓮の花が人工的に植えられ、夏の日が来るたびに、暖かい風がゆったりと吹くと、蓮の花の香りと酒の香りが四方に馥郁と広がり、人を飲まずして、また酔わしめたのであった。南宋の詩人王に詩贊があつて次の通りある「避暑の人冷泉より帰り、埠頭の雲錦、晚涼の天。愛渠せる香陣、人に隨いて遠し、行きて過ぐ高橋、方に船を買わん。」(暑さを避けていた人は冷泉から家路につけば、埠頭には錦のような雲、夜のすずしさ。愛すべきかおりは、人々から遠ざかっていく。高橋を過ぎゆき、船をたのもうとする)。清の康熙帝は西湖十景を品評した後、蘇堤跨虹橋のみぎわに曲院風荷景碑亭を建てた。

曲院風荷が最も人びとの注目をひくのは、夏の日における蓮の花の觀賞である。公園内の大小の蓮花の池の中では、100以上の品種の蓮の花が栽培されており、その中でも特別人の心を虜にするのがこの蓮の花の景勝地であるといわねばならない。ここでは水面が主人公であり、紅蓮、白蓮、重台蓮、灑金蓮、並蒂蓮等の名花が分布し、蓮葉は連なり、蓮の花は妖艶な様相を呈している。水

面上に架けられたさまざまな様式の小橋において、人はその橋上は過ぎると、蓮の花の中を通るようであり、人は花の姿に倚りかかり、花は人の顔に照り映え、花と人は互いに恋い慕うのである。



平湖秋月

平湖秋月は白堤の西端、外西湖側にある。ここは湖面に臨んで平台の視野が開けていて、中秋の夜に月と湖面を平台の座席で望むと空の満月と湖面に映った満月の両方を見ることが出来る。二つの満月はそれぞれ照らしあい、あたかも寒宮に入りこんだかのような感を与える。そのため先人の対聯に「万頃湖は平長として鏡に似、四時の月は好きも最も秋に宜し（広々とした湖は平らかで鏡のよう、四季のうちでは秋の月が最も好い）」と言うのである。



断桥残雪

西湖の雪景色は、古来より賞賛を受けてきた。『断桥残雪』の情緒はとりわけ広く知られている。断桥残雪の景觀に対する見方は一様ではないが、一般的には雪の降った冬の日、橋の日の当たる部分は氷雪が融けるが、影の部分には雪が残り、高いところからこれを望むとまるで橋が途中で途切

れているかに見える景観を指す。

毎回大雪の後、太陽が橋を照らすと、日の当たる部分では積もった雪が融け始め、影になっている部分は玉を敷き詰めたかのようにきらめき、遠くから橋を觀賞すると、まるで玉帯が煌いているかのようである。橋のたもとに佇み四方を見渡すと、遠くに山を近くに煌く湖を眺める事ができ、その景観は生気に満ち溢れ、西湖の雪景色が美しいものであることを印象付ける。中国の著名な民話である『白蛇伝』はこの景観にロマンティックな色彩を添えている。洪丞も『断雪閑望』という詩を詠いこの雪景色を賞賛している。



もっと知りたいなら、

[杭州市観光公式サイト](http://www.xitong.net/hztour/) <http://www.xitong.net/hztour/>

[杭州ナビ](http://www.hznavi.com/) <http://www.hznavi.com/>

[2006 杭州世界レジャー博覧会](http://www.waichi.info/leisureexpo/) <http://www.waichi.info/leisureexpo/>までリンクしてみてください。